

[Original Paper]

## **A Mother's Awareness of Changes in Her Child's Behavior and the Transformation of Her Values**

Hiroyuki Tanba\* and Mitsuru Onishi\*

\* Aino University, Faculty of Nursing and Rehabilitation, Department of Occupational Therapy

### **Abstract**

We conducted an interview with a mother, whose child with cerebral palsy had made progress in the operation of her electric wheelchair and just begun to show search behavior. The mother noticed and described the changes in the girl's daily life as "now my child has her own will and asserts herself," recognizing the difference from her past experience of child rearing. It led to the transformation of her sense of value. Their mother-child interaction was activated as the mother started to pay more attention to the girl's thoughts, feelings, wants and needs.

Thus we discovered that the mother's intention to identify and fulfill the child's wants and needs, as well as the girl's capability to convey her own thoughts and feelings, was the key to the continuous mutual influence between them, which stimulated the development of mother-child relationship.

**Key words :** mother, sense of value, mother-child interaction, modified grounded theory approach

# 母親が捉えた子どもの変化と母親の価値観の変容

丹 葉 寛 之\*, 大 西 満\*

【要 旨】 子どもが変化するには母親の関わり方や子どもの捉え方は重要であり、母親の関わり方が変化するには子どもの変化を感じ取る必要がある。今回、電動車椅子操作が向上し探索活動が見られるようになった頃をきっかけに脳性麻痺児の生活に変化が見られ、母親はその姿を「わがままになり、自己主張するようになった」と表現した。母親は子どもの姿から過去の子育て経験との違いに気付き、母親自身の価値観が変容し、その中で母親は子どもの思いを実現させようとする意識の芽生えの中で母子相互作用が活性化し、母子共に変化が見られた。

本研究は母親への面接調査を通して、母親が捉えた子どもの生活変化に対する気付きと母親の価値観の変容についてまとめた。結果、子どもの「思いを伝える力」を捉え、「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を持つことで、母子ともに影響しあいながら発達する関連性が明らかになった。

キーワード：母親、価値観、母子相互作用、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

## I. はじめに

空間の中で姿勢保持、姿勢変換が出来るようになると、手足の動きが選択的になり、身体や環境への探索が盛んになる<sup>1)</sup>。その中で、子どもは外界への興味、関心を高め、人や環境、モノとの関わりを高めていくと考えられている。しかし、脳性麻痺児の場合、自ら動くことに制限があるため、外界への探索行動が難しく、受身的な生活を送ることは少なくない。

今回、努力性の寝返りだけの移動手手段しか持たない学齢期の脳性麻痺児に対し、移動手手段の獲得を目的に電動車椅子の導入を試みたところ、操作性が向上してきた頃に、母親から「電動車椅子に乗り始めてからわがままになり、自分のやりたいことを主張するようになった」等、子どもの行動が変化したと捉える母親の発言が多くなった。

本研究では母親への面接調査を通して、母親が捉え

た電動車椅子導入後の子どもの変化と母親の子どもに対する価値観の変容についてまとめるとともに、それらの関連性について検討することを目的とした。

## II. 対象と方法

### 1. 対象

本研究の対象者は脳性麻痺児の母親1名である。対象者は3人の子どもを育てる専業主婦である。理学療法、作業療法などのリハビリテーションには熱心に通ってきており、子どもに対して必要と思うこと、必要なモノについては積極的に与えようとしていた。子どもに対しては慎重な関わり方で、母親一人で対処しようとすることが多い。こんなことができるようになってほしいと言う反面、子どものできることを否定的に捉え、「多分、できないだろう」という発言をすることが多い。また、子どもへの関わりにおいて、過

\* 藍野大学医療保健学科作業療法学科

介助になりすぎる傾向が見られる。

## 2. 方法

2005年7月にSリハビリテーションセンターの作業療法室で、半構成面接法にて行った。半構成面接法とは非指示的面接で前もって定められた質問順序で答えるだけでなく、決めていた質問内容を対象者との会話の流れにそって柔軟に変化させながら面接する方法である。

母親に研究内容及び目的を説明し、その際、研究への参加を拒否できること、参加を拒否した場合でも個人に不利益が生じないことを説明した。面接データは匿名化し、プライバシーが守られるように配慮し、本研究以外には使用しないことを約束した。同意を得た後、テープに録音しながら面接調査を実施した。面接回数は1回、面接時間は約1時間半であった。

面接内容は、電動車椅子導入前後における子どもの生活状況や母親の子どもに対する関わり方、思いなどである。例えば「電動車椅子を導入したあと、生活の中で子どもが変わったと感じたことは何ですか」等、質問を行い、母親が答えた内容をもとに、新たな内容が出なくなるまで詳細に表現して頂いた。

## 3. データ分析方法

面接調査によって得られたデータの分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAとする）を使用した。M-GTAは現場に入ることから研究を開始し、現場に関係のある事柄を明らかにしていき、データの解釈から説明力のある概念を生成し、概念の関連性を高め理論化していき、それを実践的活用につなげるものである。また、M-GTAは質的データの概念生成を通して、データを客観化していき理論化を行うものであり、今後の実践につなげていくことに適している分析方法である<sup>2)</sup>。特に社会的相互作用に関係し、人間行動の予測の説明に関わること、研究者によってその

意義が明確に確認されている研究テーマによって、限定された範囲における説明力に優れた理論である<sup>3-5)</sup>。

今回は電動車椅子操作をきっかけとした子どもの生活変化を母親が捉えていると考えられる発言から、子どもの変化の捉え方が母親の価値観にも影響を与えたのではないかと、また、面接により対象者の声をデータとして得られたことから、詳細に母親と子どものやりとり（社会的相互作用）の変化、その変化のプロセス過程を捉えていくことが出来るのではないかと考え、M-GTAを分析方法として選択した。

## 4. データ分析手順

分析手順として、面接内容をテープに録音し逐語化しデータとした。データ全体を意味が通じる関連のある文節毎で区切り、データの意味を表現する概念名をつけた。次に生成した概念と他の概念との関係を個々に検討し、複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成した。カテゴリー相互の関係から一つのコアカテゴリーを中心として分析結果をまとめ、結果図を作成し、結果図を確認するために各々の概念を簡潔に文章化（ストーリーライン）した。

次に、概念生成過程を例示する。『』は対象者が語った言葉である。

『薬を飲むときに、私が袋を切ろうとしたら手が伸びてきて切りたい。そのごみも放りたい』、『洗濯物が子どもの周りにあり、私が畳んでいたら、いちいちハイって渡してくるんです』

## データ分析手順

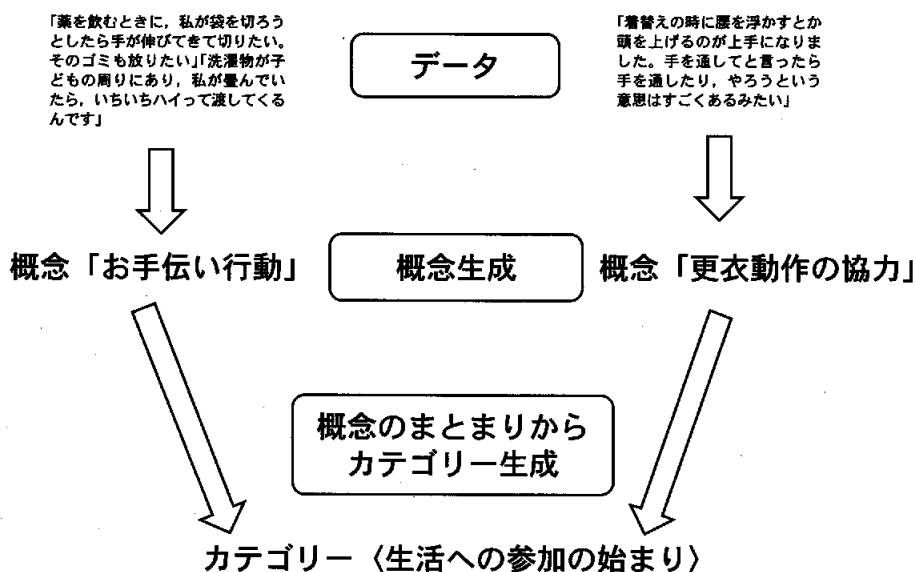


図1

ハイって渡してくるんです』等という発言から「お手伝い行動」という概念を生成した。また、『着替えのときに腰を浮かすとか頭を上げるのが上手になりました。手を通してといったら手を通したり、やろうという意思はすごくあるみたい』等という発言から、「更衣動作の協力」という概念を生成した。このように各概念のまとまりにおいて関係のあるものを〈生活への参加の始まり〉というようにカテゴリー化していった。

その後、各カテゴリー間の関連性を分析し、コアカテゴリーを中心に両者の関連性の検討を行った。(図1)

### III. 結 果

逐語録の総文字数は14318文字であった。M-GTAによる分析で8のカテゴリーと25の概念が生成された(表1)。それを基に結果図(図2)及び、簡潔に

表1 生成された概念・カテゴリー表

カテゴリー	概 念	具 体 例 (一例)
生活への参加の始まり	お手伝い活動	肩が凝っていたのでマッサージをお兄ちゃんに強要すると、この子も力はないけどそばによってきて一緒にたたいたりするんです。
	食事行動への参加	食事のときに塩を自分でかけたい、マヨネーズも自分でかけたい。それがちょうど、電動に乗り始めてからできてきたんです。
	更衣動作の協力	着替えのときに腰を浮かすとか頭を上げるのが上手になりました。手を通してといったら手を通したり、やろうという意思はすごくあるみたい。
	伝達手段の拡大	いっぱい自分で考えたジェスチャーをしてくれるので。靴下はかせてにしろ。今までなかったけど、最近、髪の毛をくくって言うのができてきて。
	他者へのあいさつ	電動を運転しながら、人におつかりそうなときに自分から頭をべこべこ下げているんです。
	床上での移動範囲の拡大	家にテレビが2台あって、小さいほうをこの子用にしている、そっちに寝かしているけど、画面を見比べて大きいテレビが良いって、すごい勢いで転がってくるんです。今まではそういうのはなかった。
運動機能の拡大の兆し	手づかみ食べの口への命中率の向上	お菓子を持ったときの口への持っていく方は、断然、命中率が上がって。前やったらこの辺(頬など)やったけど、今はがぶっと、かじりとしてそのまま食べるのができるようになっている。
	友達との場の共有	みんなが自転車走っていて、この子も得意そうに電動で同じように走っている。
友達関係の芽生え	友達関係の中での満足感	周りの子が自転車で追いかけてきて、他の子の前で優越感ではないけど、同じことができるんやとか、すごくうれしそうにするのが何回かあって。
	自分でやりたい気持ち	今はとにかく手がよく出てきます。自分も自分もって感じで何でもやりたがる。
自我の拡大の始まり	ごまかせないが交渉に応じる力	主張はすごくするし譲れへんけど納得すると前より待てるようになった。
	家で過ごすことが退屈	去年の夏休みは2、3日テレビを見るだけで家で過ごせたけど、今年は朝から出かけたって言う。朝起きたら訴えてくる。
	子ども自身の遊び方	買い物に行こうって訴えるから連れて行くと、車から降りるのを嫌がり待ってるって。私は来るまで待っていてもしょうがないと思うけど、この子はテレビを見てたり鼻歌を歌って楽しんでいるんです。
	他者への自己主張	学校生活の中でも、割と集団の中でも一番手を上げるようになった。
子どもに対する評価基準	否定的側面	やっぱり手も思うように動かないし、私の中ではやっぱりこの子は無理何や、どうせ出来ないんやっていう観念が入っている。
	肯定的側面	言葉も割りと理解してこっちの言うこともわかっているし、電動もあれだけ出来るしこの子は見た感じのレベルよりももっとわかっているんやなあ。
	介助なしで出来ること	電動みたいに一人で乗っていたら出来たって思うけど。
子どもの能力の発見	子どもの予想外の行動	電動は成人するくらいになって、一緒について回ったら乗れるときがくるかなあ位にしか思っていなかった。
	母親の予測とのギャップ	この子が電動に乗っていなかったらこの子がこっちに行きたいって言うのがぜんぜんわからなかった。私はこっちでいいやろうと思って言うけど、この子はバックして逃げていく。私が思っていない意外な行動をするんです。
	子どもの要求の理解	前はいっぱい言いたいことがあったけど、ただ、泣いているだけ。私も何が言いたいのかが、わからなかったけど、今はジェスチャーでかなり分かります。
子どもに対する関わり方	慎重な関わり方	私は迷惑をかけたらかん、お騒がせしたらあかんって言うのが先にたつので。だから、電動は他の人に任せられない。
	やらせたい思い	やっぱりこの子が自分からしたいんやって手を出したら、させやなあかんというのがあって。
	あきらめ	こっちがさせようと思っても(子どもが)やらなかったからだんだんあきらめてきて。
母子相互作用	思いを伝える力	いまはゼスチャーでかなりわかるので。外に行きたい時は靴下をはかせてとかまどを閉めてとか、のどかわいたとか、大体わかるので。それはすごくあります。
	思いを感じ取り実現させようとする気持ち	出かけるだいぶ前から、怒りながら訴えてくる。始めはわからなかったから待たしてけど、結局、靴下はかせて髪をくくってことやって。それに気付いてすると、ころっと機嫌なおして。

## 結果図

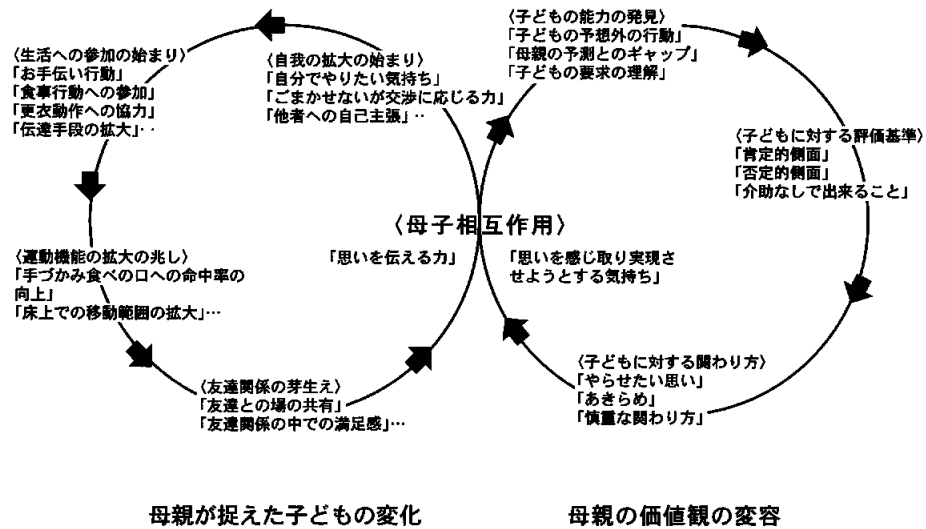


図 2

文章化したストーリーラインを作成した。以下にカテゴリーとそれぞれの概念、定義、具体例について示した後、結果図、ストーリーラインを示す。

なお、文章中の〈〉はカテゴリー、「」は概念、『』は具体例を示している。

### 1. カテゴリーとそれぞれの概念、定義、具体例について

#### 〈自我の拡大の始まり〉

『今はとにかく手がよく出てきます。自分も自分もって言う感じで何でもやりたがる』と言うように「自分でやりたい気持ち」を高めていく姿、『主張はするし譲れへんけど、納得すると前より待てるようになった』というような「ごまかせないが交渉に応じる力」、『学校生活の中で、割と集団の中でも1番に手を上げるようになった』という「他者への自己主張」等を通して、積極的に生活に参加していこうという姿が見られるようになったことから〈自我の拡大の始まり〉と命名しカテゴリー化した。

#### 〈生活への参加の始まり〉

電動車椅子導入以前は『去年の夏休みは2、3日テレビを見続けていても、家で過ごせた』というように、自ら何かをしたいという姿を示してくることは見られなかったが、『食事のときに塩を自分でかけたい、マヨネーズも自分でかけたい』というような「食事行動

への参加」、『私が洗濯物を畳んでいるとハイって渡してくるんです』というような「お手伝い行動」、『更衣動作の協力』、『伝達手段の拡大』等を通して、日常生活に主体的に参加しようとする姿が見られるようになったことから、〈生活への参加の始まり〉と命名しカテゴリー化した。

#### 〈運動機能の拡大の兆し〉

『好きなテレビがやっている時、すごい勢いで転がってくるんです。以前はそういうのは無かった』というような「床上での移動範囲の拡大」、『お菓子を持ったときの口への命中率は、断然にあがった。前はここ（頬）にあたるが多かったけど』というような「手づかみ食べの口への命中率の向上」等、生活の中に主体的に参加し、繰り返し動作を行うことで、運動機能が拡大し、生活動作に主体的に参加する姿が見られるようになったことから、以前に比べ、生活動作がスムーズに行えるようになってきた過程として〈運動機能の拡大の兆し〉と命名しカテゴリー化した。

#### 〈友達関係の芽生え〉

『みんなが自転車で走っていく後を、この子も電動で得意そうに走って行って』という「友達との場の共有」や「友達関係の中での満足感」を得ることにより、自分から友達に関わろうとする姿が見られるようになったことから、友達との関わりを持つようとする〈友

達関係の芽生え」と命名しカテゴリー化した。

#### 〈子どもの能力の発見〉

『電動は成人するくらいになってから、一緒について回ったら乗れるくらいにしか思ってなかった』という「子どもの予想外の行動」、『私はこっちでいいやろうと思っていただけ、この子はバックして逃げていく私が思っていない意外な行動をするんです』という「母親の予測とのギャップ」等、母親の予測していた子どもの姿とは違う行動をする姿から、母親は子どもの持っている能力を発見していることから〈子どもの能力の発見〉と命名しカテゴリー化した。

#### 〈子どもに対する評価基準〉

『言葉もわりと理解して、電動もあれだけ出来るし、この子は見た感じのレベルよりもわかっているんやろうな』という「肯定的側面」を持つ反面、『電動みたいに一人で乗っていたら出来たって思うけど』という「介助なしで出来ること」という評価基準を持っているため、『やっぱり手も思うように動かないし、私の中ではやっぱりこの子は無理なんや、どうせ出来ないんやって言う観念が入っていて』という「否定的側面」を持っている。母親は「介助なしで出来ること」を子どもが出来ることとする価値基準を持っているため、「肯定的側面」と「否定的側面」の相反する思いを持っているので、子ども自身で出来ていると母親が判断するレベルとして〈子どもに対する評価基準〉と命名しカテゴリー化した。

#### 〈子どもに対する関わり方〉

『私は迷惑をかけたらかかん、お騒がせしたらあかんっていうのが先に立つので、電動は他の人に任せられない』という「慎重な関わり方」、『やっぱりこの子が自分でやりたいんやって手をだしたら、させないとあかんというのがあって』という「やらせたい思い」、『ちょっとは自分ですくって食べてくれるかなあって言うのはあるけど、無理やろうなあとあって』という「あきらめ」という意識を持っている。子どもの思いを感じ取り、実現させようと思う反面、一方で、「あきらめ」という意識が働き、生活場面の中で、子どもの思いを感じつつも、実現させることが出来ていない母親の姿が伺えるので、生活場面での子どもに対する母親の関わり方として〈子どもに対する関わり方〉とした。

#### 〈母子相互作用〉

『イトーヨーカドーに買い物に行ったときに車から降りるのがイヤ。車で待っていたって訴えるんです。私は待っていてもしょうがないと思うけど。』というように、母親は「子どもの思いを伝える力」を捉えている。また、『旅行に行く日の夜中に起きて、怒っているんです。私は早く寝ようというけど、怒り続けて。結局、服を着替えさせろっていうことだった。着替えさせると満足しておとなしく待ち続けるんです』等というように、母親は子どもの「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を示す姿が伺える。このように母親が捉えた子どもの変化と母親の価値観の両方を含む概念が生成されており、母親は子どもの思い、やりたい気持ちを捉え、実現させようとする相互のやり取りをしていることから〈母子相互作用〉と命名しカテゴリー化した。

## 2. 結果図

図2に結果図を示す。生成されたカテゴリー及び概念は母親が捉えた子どもの変化に関するカテゴリーと、母親の価値観に関するカテゴリーに大別された。結果図の左側の円を母親が捉えた子どもの変化に関するカテゴリー、右側の円を母親の価値観に関するカテゴリーとして結果図を作成した。結果図は無限大( $\infty$ )で示しているが、これは母親自身の価値観が変化するためには、子どもの変化を捉える視点を持つことが必要であり、子どもが変化するために母親の価値観が影響することを示している。しかし、その関係性は直線的に進むものではなく、母親は子どもに関わる中で様々な反応に気づき、喜び、不安、満足感などの様々な感情を持ちながら育児を行い、子どもは母親の関わり方により行動が変化する。すなわち、ポジティブな相互関係、あるいはネガティブな相互関係に成りうる可能性があることを示している。

結果図の中央に〈母子相互作用〉が位置しているが、母親が捉えた子どもの変化と母親の価値観の両方を含む概念が生成されていることから結果図の中央に位置し、コアカテゴリーとした。

## 3. ストーリーライン

母親は子どもが電動車椅子を一人で操作し、自由に探索することが出来るようになってきた頃から、〈自我の拡大〉〈生活参加への始まり〉〈運動機能の拡大の兆し〉〈友達関係の芽生え〉など、カテゴリーに示されるように、子どもの行動面が変化した姿を捉えてい

る。このような行動の中で子どもは母親に思いを伝えようとしており、母親は子どもの行動の姿から、子どもの内的欲求に気づき、〈子どもの能力の発見〉をしていく。母親は子どもの姿を肯定的に捉えていくが、母親の価値観が全て肯定的に変化するのではないため、〈子どもに対する評価基準〉として否定的な捉え方をすることが見られる。〈子どもに対する評価基準〉により、〈子どもに対する関わり方〉は変化しネガティブな行動を示すことがある。しかし、母親は子どもの「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を持っているため〈子どもに対する評価基準〉で「否定的側面」を持ちつつも、子どもの「思いを伝える力」を再び感じ、生活の中で子どもの思いを受け止め、母親が行動する姿が見られる。これは、両者が「思いを伝える力」「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を持つことにより〈母子相互作用〉が活性化され、互いに影響し合いながら発達する関連性を示している。

#### IV. 考 察

母親から得られた質的データをM-GTAにより分析し、生成されたカテゴリーから各々の関連性の考察をすすめていく。分析結果から子どもの変化に関するカテゴリーが生成されているが、これは母親が捉えたものである。考察においては母親が子どもの変化をどのように捉えたかに焦点を当てるため、子どもの個別性の変化ではなく母親自身が捉えた変化から考察をすすめていく。

##### 1. 母親が捉えた子どもの変化に関するカテゴリー間の関連性

正常発達において、子どもが主体的に生活に参加するようになるのは、1歳半を過ぎた頃であり、自分でやりたい気持ちを高めていく自我の芽生えが必要になってくると考えられ、その結果、手伝われることに対して拒否する姿、出来なくても自分でやってみようという姿が発達の中で見られるようになってくる。子どもは受け身的な生活場面への参加が多かったが、電動車椅子を主体的に操作できるようになった頃をきっかけに、自分でやりたい気持ちを高めていく姿が現れ、母親はカテゴリーに示される変化を捉えていった。

〈母子相互作用〉をコアカテゴリーとして、母親が捉えた子どもの変化に関するカテゴリーが存在し、〈自我の拡大の始まり〉〈生活への参加の始まり〉〈運動機能の拡大の兆し〉〈友達関係の芽生え〉の4つの

カテゴリーに分類された。

電動車椅子を導入後、母親は今までとは違う子どもの変化を捉えている。母親はその変化を『(子どもが)電動車椅子に乗り始めてからわがままになり、自分のやりたいことを主張するようになった』という言葉で表現している。これは〈自我の拡大の始まり〉を基盤とした生活変化の始まりの姿と考えられる。

子どもは、電動車椅子の操作性が向上し、実用的になるにつれ、母親の言葉にあるように、『電動に乗っているとき、(母親が) こっち行つてと言った時に応じるときと、この子はこっちの売り場に行きたいと思って反対に行ったりとか、親が思い込んでいるのと違うところに行くのです』というように、積極的に自分で動く経験を通して、外界への興味、関心、探索を高めていった。このことは、自分で出来ることの楽しさを感じ、自分の身体を通して試行錯誤や達成感を高めることに繋がる。このような姿を積み重ねていくことは、自我の充実、拡大に繋がり、主体的に生活に向かう基礎の力に結びつくと母親が捉えるようになってきたと考えられる。

カテゴリーに示されているように、本児は〈生活への参加の始まり〉など主体的な姿が見られるようになったと捉えている。これは「自分でやりたい気持ち」「家で過ごすことが退屈」など〈自我の拡大の始まり〉を基盤にし、自分でやってみようという思いとともに、「お手伝い行動」「食事行動への参加」「更衣動作への協力」など〈生活への参加の始まり〉が見られ、子ども自らが主体的に生活に参加する姿が見られるようになった。その中で、繰り返し動作を行うことで、〈運動機能の拡大の兆し〉に示される「手づかみ食べの口への命中率の向上」にもつながったと考えられる。また、〈友達関係の芽生え〉に示される、「友達との場の共有」「友達関係での満足感」は、自我の基盤に必要な他者との共感、共通の生活経験の姿と考えられ<sup>6,7)</sup>〈自我の拡大の始まり〉に影響を与えるものと考えられる。

母親はこのような子どもの生活変化を捉えたが、そのためには、母親の気づきが必要であった。そのきっかけになったのは、今までの子育ての体験とは違う新たな体験をしたことからであると考えられる。母親は自分の思い、予測とは違う子どもの予想外の行動を見る発見を通して、過去の記憶とは違う現実、自分が感じていた価値観とは違う子どもの姿を目にした。氏が養育者の発達において個人の体験や、子どもの発達に対する知識などの重要性を述べている<sup>8-10)</sup>ように、

母親は子どもの姿から過去の経験との違いに気付き、子どもを理解する視点を持つことが出来たと考えられる。

母親が子どもの変化を捉えるためには子ども自身の能力だけではなく、母親自身が子どもの様々な反応に気付き、子どもの思いを実現しようとする母親の関わり方も重要な要素となる。動きの少ない脳性麻痺児の場合、受け身的になり自我の弱さが見られることが多いが、母親が子どもの思いに気付き、受け止めていくことが自我を育て、積極的な行動を作り出すことにもつながる。母親は子どもの変化した姿を『わがままになった』という言葉で表現しているが、そこには子どもに対する〈自我の拡大の始まり〉に対する気付きが存在する。その中で母親は子どもの能力を発見していき、自分自身の関わり方の意識、行動が変化したことが子どもにも影響を与えたと考えられる。

## 2. 母親の価値観の変容に関するカテゴリー間の関連性

〈母子相互作用〉をコアカテゴリーとして、母親の価値観の変容に関するカテゴリーが存在し、〈子どもに対する評価基準〉〈子どもの能力の発見〉〈子どもに対する関わり方〉の3つのカテゴリーに分類された。

母親は子どもの生活参加が受け身的な時期は、〈子どもに対する評価基準〉に示されるように、子どもの姿を「否定的側面」として捉えることが多かった。しかし、電動車椅子操作が向上し、時間的経過と共に、子どもの生活参加が主体的に変化してくることに伴い、〈子どもの能力の発見〉に示されるように、『電動車椅子は成人するくらいになって一緒について回ったら乗れる時が来るかなあ位にしか思っていなかった』というような「子どもの予想外の行動」や「母親の予測とのギャップ」「子どもの要求の理解」を感じていき、〈子どもに対する評価基準〉が『この子は見た感じのレベルよりもっとわかっているんやなあ』と言うように「肯定的側面」を持つことへと変化している。しかし、一方で母親は『電動みたいに一人で乗れたら出来たって思うけど』と言うように、〈子どもに対する評価基準〉のひとつとして「介助なしで出来ること」という意識を持っている。また、『やっぱりこの子が自分でやろうと手を出したら、やらせないとかんというのがある』というような「やらせたい思い」と『ちょっとは自分で食べてくれるかなあって言うのはあるけど、自分ですくって口に持っていくのは無理やなあと思って』というような「あきらめ」という両方

の意識も持っており、母親の意識のすべてが、肯定的に変化しているとも言い難い状況にある。

〈子どもの生活への参加の始まり〉は、母親の価値観に影響をもたらす、〈子どもに対する評価基準〉を「否定的側面」から「肯定的側面」へと変化させるものである。しかし、母親は子どもに対し「慎重な関わり方」を行う傾向があること、「あきらめ」の気持ちがあることから、〈子どもに対する評価基準〉が「肯定的側面」「否定的側面」の両者を循環する価値観を持っていると考えられる。そのため、〈母子相互作用〉の概念である「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を持っているが、常に一定の状態を保っている訳ではない。しかし、結果図の中央に〈母子相互作用〉が位置するように、母親は子どもからの「思いを伝える力」を感じ取る中で、相反する思いを修正しつつ、子どもに関わる姿が伺えると考えられる。

## 3. 母子相互作用をコアカテゴリーとした相互の関連性について

本研究の結果図の中央に〈母子相互作用〉が存在し、子ども側は「思いを伝える力」を示し、母親側は「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を示している。言い換えれば、どちらか一方でも存在しなければ、〈母子相互作用〉は生じずに母親主体の育児や子どもの受け身的な生活、あるいは母子ともにストレスを感じながらの生活を送る可能性があると考えられる。

子どもが障害を有する場合、動きの制限、外界への探索の乏しさからくる受身的な姿があり、子どもの反応の捉え方、関わり方がわからずに、母親主体の育児を行う傾向があると考えられる。対象の親子も、そのような母子関係を示していたと考えられる。鯨岡は、子どもを主体として受け入れるか、自分の思いを優先させて関わるかは子育ての大きな岐路になり、そこに子どもと母親の両者での気持ちがつながり、情緒的な関係性が生まれる。その関係性は、子どもが生き生きとした豊かな人生を送るために必要であると述べている<sup>11)</sup>。また、子どもの主体性を引き出すには子どもの表現を敏感にキャッチし、それをひとまず受け入れる姿勢が重要であり、子どもの表現を周囲の大人がどのように受け止めるかによって、子どもの主体性の発揮の仕方が異なってくると述べている<sup>12)</sup>。対象者の母子関係の中で母親は子どもの表現に気付き、子どもは母親に思いを受け止めてもらい、生活の中で主導性を引き出すような関わりを実現してもらえたことで満足し、主体的な生活参加が見られたと考えられる。



今回の研究から、母親は子どもの現状を捉え〈子どもの能力の発見〉をしていくことで「肯定的側面」を持ち、〈子どもに対する関わり方〉の中で「あきらめ」という意識により「否定的側面」を持つが、子どもの「思いを伝える力」を受け止め、母親自身が「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」の相互作用の中で「否定的側面」が修正されるプロセスが確認された。しかし、結果図に示しているように修正されたプロセスは一方向に直線的に進むものではなく、母親の様々な思いや感情が葛藤する中で揺れ動くものであり、相反する思いを持ちながらも、相互作用の中で修正されるものであった。

このように、子ども自身の発達、母親自身の発達があり、両者の発達を通してお互いが影響し合う存在になる。そのためには、子どもは「思いを伝える力」を高め、母親は「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」を高めていき、両者が存在する中で〈母子相互作用〉が活性化されると考えられる。

## V. ま と め

本研究では、母親の「わがままになり自分のやりたいことを主張するようになった」という発言をきっかけに研究を行った。母親が何故、そのように感じたのかを明らかにするために半構成面接を行い、M-GTAを用いて母親が捉えた電動車椅子導入後の子どもの生活変化、母親の価値観についてまとめ、相互の関連性を分析した。その結果、母親は子どもの〈自我の拡大の始まり〉をきっかけにした生活変化に気づき、〈子どもの能力の発見〉をしていく中で母親の価値観が変容していく。しかし母親の〈子どもに対する評価基準〉に「否定的側面」「肯定的側面」を持っているため、相反する価値観を持つことになるが、母親が捉えた子どもの変化と母親の価値観の変容には〈母子相互

作用〉として「思いを伝える力」「思いを感じ取り実現させようとする気持ち」が内在していることから、互いに影響し合いながら相反する価値観を修正しながら、母子ともに発達する関連性が明らかになった。

## 謝 辞

稿を終えるにあたり、本研究にご協力いただいたAさんに、心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 岩崎清隆, 岸元光男. 発達障害と作業療法 実践編. 東京:三輪書店;2001. p.46.
- 2) Holloway I, Wheeler S, 野口美和子訳. ナースのための質的研究入門. 東京:医学書院;2002.
- 3) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生——. 東京:弘文堂;1999.
- 4) 佐川佳南枝. 分裂病患者の薬に対する主体的獲得に関する研究——グラウンデッド・セオリーを用いた分析. 作業療法 2001; 20(4): 344-51.
- 5) 戈木クレイグヒル滋子. グラウンデッド・セオリー・アプローチ——理論を生み出すまで. 東京:新曜社;2006.
- 6) 荒木穂積, 白石正久編. 発達診断と障害児教育. 東京:青木書店;1989. p.86-108.
- 7) 白石正久. 発達の扉 上. 京都:かものがわ出版;1994. p.134.
- 8) 氏家達夫. 乳幼児と親の発達. In: 麻生武, 内田伸子責任編集. 人生への旅立ち:胎児・乳児・幼児前期(講座生涯発達心理学 2). 東京:金子書房;1995. p.99-116.
- 9) 氏家達夫. 子育てと親育ち. 発達 1998;19(73): 13-20.
- 10) 辛島千恵子. 発達障害をもつ子どもと成人, 家族のためのADL. 東京:三輪書店;2008.
- 11) 鯨岡峻. 〈育てられるもの〉から〈育てるもの〉へ——関係発達の視点から(NHKブックス 938). 東京:日本放送出版協会;2002. p.121-7.
- 12) 鯨岡峻. 母と子のこころをつなぐコミュニケーション. 作業療法 2006; 25(6): 478-81.